

## 大学における自閉症スペクトラム学生への支援体制構築を困難としている要因 ——個別事例からの検討——

北陸学院大学 俵希實

### 1 目的

自閉症スペクトラム (ASD) は、近年、急速に社会問題化されてきた。高等教育機関においても ASD 学生に対する支援体制の構築が叫ばれている。高等教育機関に在籍する発達障害のある学生は増加傾向にあり、把握されているだけでもその数は 2,393 人である (日本学生支援機構 2013)。この数字は診断を受けた学生に限られており、自閉的傾向のある学生など診断を受けていない学生を含めるとかなりの人数が高等教育機関に在籍していると考えられる。2005 年には発達障害者支援法が施行され、発達障害のある学生への教育的な支援の必要性が明文化された。しかし、支援体制の構築が進んでいる高等教育機関は少ない。また、教育現場における ASD に関する社会学的研究については、初等・中等教育を対象としたものが主であり、高等教育機関における ASD の状況等に関する研究はほとんどない。そこで、大学における ASD 支援体制モデルを構築することを目的として本研究を開始した。今回の報告は、研究の第 1 段階として、ASD または ASD と思われる学生の事例を検討することから、ASD 学生への対応を熟考し、その上で大学において ASD 学生に対する支援体制の構築を困難としている要因を考察する。

### 2 方法

報告者の所属機関に在籍する ASD または ASD と思われる学生を事例とした検討会を定期的実施し、そこで検討された内容から、大学において ASD 学生に対する支援体制の構築を困難としている要因を考察した。検討会では、毎回学生 1 人を取り上げ、その学生と関わっている教職員で情報交換をおこないながら、臨床心理士とともに事例とした学生の言動などを把握し、対応を熟考した。

### 3 結果

事例検討会で出された主な対応策は次のとおりである。

評価基準は下げずに評価の方法を個人によって変える。合格点に到達できなければ何度でも再履修させる。留年しても仕方がない／誰に対して、どこまで支援するかについては基準が必要である。診断の有無を基準にしてもよいかもしれない。対象者のスクリーニングは仕方がない／教職員間の情報共有を目的として個人カルテを作成する (学生との関わりを記録に残す) / 対象者の情報を高校から収集する / TA を活用する / 対象者に対して必要以上にやさしく接する必要はないが、手をかけることも大切である。

### 4 結論

事例検討から大学において ASD 学生に対する支援体制の構築を困難としている要因を考察した。第 1 の要因は、大学の保有資源 (人的資源、経済的資源) が限られていることである。オーダーメイドの評価方法、個人カルテの作成、TA の活用といった対応策は資源が不足していると実施することができない。第 2 の要因は、特定の人に支援の負担が集中していることである。検討された対応策を実施するには人々の協力が必要となる。しかし実際は、面倒見のよい人や福祉的対応に長けた人に支援の負担が集中しがちとなっている。特定の人に負担が集中すると、質を担保した継続的な支援をおこなうことが難しくなる。以上から、大学がどの程度の資源を保有していればどの程度の支援体制を構築することができるのかを明らかにすること、特定の人への負担を防ぐこと、これら 2 点を踏まえて、ASD 学生に対する支援体制モデルを構築することを今後本研究では目指していく。